

Newsletter

2005. Jul. No.6

教養教育と「他者」

教養研究センター副所長 田上 竜也



昨今、「教養教育」の是非が盛んに論じられていますが、その意味するところは人格陶冶、専門職業教育と対立する一般的・知的能力の養成、エリート育成、はたまた大衆市民教育などさまざまな歴史的概念の混淆したものであり、今日的な視点から不断に問い直されるべきものであると考えます。教養研究センター設立以来、「新たな教養教育モデル」を構築し、「洞察力に満ちたジェネラリスト（学際的・超越的人間）を育成する」ことが目標に掲げられ、さまざまな取り組みが続けられてきましたが、それは教育現場のニーズと、領域の曖昧なる「教養」という概念とを擦り合わせていく作業といえます。

実際、教育現場に身を置いていると、ポップカルチャーやケータイ・ネット情報に染まった若者たちに古典的読書の重要性をいかに力説しても暖簾に腕押しであり、短期的に成果の出る実用的・直接的知識への需要を前にしては、旧来の教養主義は非力の感を否めません。しかしながら、大学に身を置く短期間に学生にいささかなりとも「教養」的な知見を深めてほしいと願うのは、「教養」が現実を複眼的に見る、「他者」の視点を持つために有効な手段であると考え

るからです。たとえば同じ現実に対しても、法学者と経済学者、社会学者、文学者……では見方が異なり、理系となるとさらに径庭は大きくなります。こうした相異なる立場について、せめて基本的な手ほどきを受けていれば、人生で直面するあまたの問題に対して複数の角度から検討する道が開かれることでしょう。別の例を挙げれば、シェイクスピアについて学ぶのは、あらずじや有名な科白などについて雑学的な豆知識を増やすためではなく（人生においてそのような知識が有益な場面は少なくありませんが）、作品に描かれた人間のありようが、人間の普遍性と現代人の特殊性を照らし出す「他者」であるからにほかなりません。

自分を知るということは、畢竟「他者」との関係性においてのみ可能となるのであり、その意味で「教養教育」とは教育の場で若者の自分探しを促す機会でもあります。また、「他者」認識は単に書物による知識からだけではなく、身体を介した現実との関わりからも獲得されるものであり、その意味で従来の「教養」観においては閑却されてきた実践活動・身体経験も今後は重要になっていくことでしょう。

CONTENTS

教養教育と「他者」	田上 竜也	1
活動報告		2
トピックス		7
インフォメーション		8
事務局だより		8

学術フロンティア「表象文化に関する融合研究」終了

昨年度は、2000年度に文部科学省私立大学高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）として採択された「超表象デジタル研究センター：表象文化に関する融合研究」プロジェクトの最終年度でした。開始以来の各年度における活動は、それぞれの年度ごとに報告してきましたので、ここでは本プロジェクトの2004年度の活動について概括的に報告します。

2004年度は、前年に引き続きプロジェクト全体の目標を以下のように定め、それに沿った形で各研究グループも活動を展開することを確認することから始まりました。

表象文化に関する諸研究の連携を図る。

各研究グループが扱う多様な表象活動についての研究の統合化を図る。

統合化された成果をリベラル・アーツ教育（教養教育）のモデルとして構造化する。

さらに、プロジェクトの最終年度ということもあり、全体のとりまとめということ念頭に置いて研究活動を行うことがあわせて確認されました。

なお、2004年度の本プロジェクトを構成する研究グループは以下の通りでした。

「リベラル・アーツ教育の総合モデル構築」

研究代表：湯川武（商学部教授）

「大学キャンパスにおける学生の適応に関する総合的研究」

研究代表：木島伸彦（商学部助教授）

「民族イメージの言語性と身体性」

研究代表：羽田功（経済学部教授）

「文化としてのウォーキング」

研究代表：近藤明彦（体育研究所教授）

「空間と人間 - キャンパス・スフェアにおける適応・生態・表象・デザインの分析と展開」

研究代表：高山博（文学部教授）

「インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性」

研究代表：熊倉敬聡（理工学部助教授）

「フレーム意味論・構文的アプローチによるオンライン日本語語彙情報資源の構築」

研究代表：小原京子（理工学部助教授）

「外国語の自律学習プログラムの開発」

研究代表：朝吹亮二（法学部教授）

「21世紀のアメリカをめぐる文化のダイナミズム」

研究代表：近藤光雄（経済学部教授）

「異文化共存の可能性と限界 - 地中海世界における異文化ネットワークと人口移動」

研究代表：西村太良（文学部教授）

「色と紋様の総合科学 - 異分野からのアプローチ」

研究代表：秋山豊子（法学部教授）

打ち合わせなどの諸会議を除くプロジェクト全体としての2004年度中の主要な活動は以下の通りでした。

1. 本プロジェクトのウェブサイトの立ち上げ（2004年7月）
2. 最終報告会（2004年11月6日、来往舎シンポジウム・スペースにて）

各研究グループの成果報告を行い、その後全体のとりまとめ方針を検討。

3. 研究成果総括委員会の設置と総括作業（2004年12月）
4. 最終成果パネル展示会（2004年3月4日より、来往舎ギャラリーにて）
5. 研究成果報告書の作成と刊行

全7巻の報告書を出版し、2005年5月に文部科学省に提出。また、関係各機関・部署および関係者へ配布。

本プロジェクトに関しては問題点や今後の課題として残ったことも多々ありましたが（詳しくは上述の最終成果報告書を参照のこと）、全体としては大きな成果をあげ、日吉キャンパスの研究・教育の活性化に貢献できたと評価しています。

最後になりましたが、本プロジェクトの遂行にあたり、お世話・ご支援下さったすべての皆様に厚くお礼申し上げます。

（湯川 武）



2004年度基盤研究最終報告

1. 研究会発足の背景

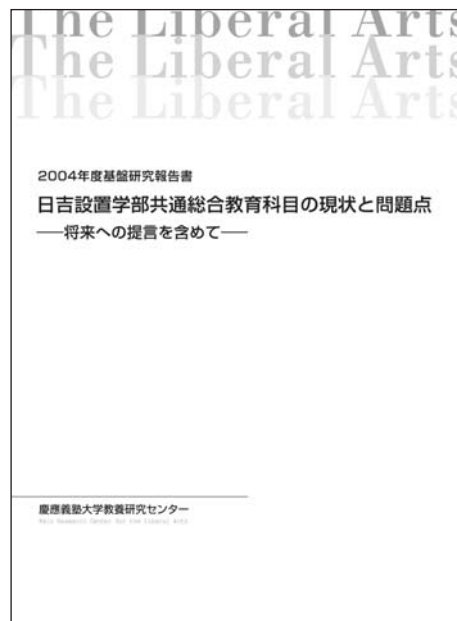
「教養教育」に関わる議論は昨今始まったものではありませんが、1991年の大学設置基準の大綱化が重要な契機となったことはその後の経緯からして明らかです。これは、従来の「一般教育対専門教育」という序列階層的かつ連続性に乏しい科目配置を排する目的で、「一般教育」を「総合教育」などといった名称に改め、両者のより有機的な結合を軸に学士課程全体の再構築を促すものでした。慶應義塾においても1993年以降学部単位でカリキュラム改訂が実施されましたが、その後も、グローバル化の進行に伴う競争原理が優勢となるなか、さまざまな側面、大学における「教養教育」の質そのものが厳しく問われている状況が続いています。

教養研究センターの開設は2002年7月のこととなりますが、それに先立つ2001年1月、のちにセンター初代所長に就任することとなる羽田功経済学部教授を座長として、「新たな教養教育モデルの構築」を目的とする文科省の委託研究が始まり、その報告書『教養教育グランド・デザイン 新たな知の創造』が2002年3月に公表されました。この研究が提示した教養教育モデルは、いわば新築モデルであって学部の縦割り前提としていません。義塾を含めた既存の総合大学でこれからの「教養教育」がいかにあるべきかを問うのは、リフォームや増築を問題とするのであり、その増改築に手をつけるには現状診断が必須です。2003年11月に発足した第1期の基盤研究は、短期的には、学部ごとに導入されている Semester 制や2008年の義塾創立150年を視野に入れつつ、上記文科省委託研究の成果を義塾に特化して引き継ぐべく構想されたもので、13回の定例研究会を経て2005年3月をもって終了しました。

2. 日吉設置学部共通総合教育科目全調査

「教養教育」が問題視される際によく言われるのは、その「混沌とした無規範性、体系性の欠如」であり「連続性や統合性を欠いた教育の断片化」です。これに教員の自己満足的な恣意性と孤立化が加わって、時代の要請にも学生のニーズにもまともには対応できない教育が跋扈しているというわけです。果たして事実はいかに、というのが調査の出発点でした。

2004年度センター基盤研究の主眼は、最終的には、義塾における「教養教育」の全体像の把握に置かれることとなりましたが、その射程に、「教養教育」の理念やそれを実際に運営可能にする組織や制度の模索・追求が含まれるのは当然のことです。具体的な作業は、日吉設置の学部共通総合教育科目（外国語科目を除く）の2001年度～2003年度分について、その設置科目数、テーマ分布、授業形態、担当教員数とその内訳（所属学部別専任者数および非常勤数）科目ごとの総履修者数などを、当該年度の講義要綱と履修データなどによりフィッシュ化して、分析・検討を行う一方、いくつかの科目についてはその担当者を招いて、授業科目に関わる理念や講義



法、今後の展望などについてヒアリングを実施しました。こうした調査や意見聴取をもとに、分野・系列という枠組みや授業形態などを含めた科目配置の問題点、科目設置の決定機関とその責任体制、さらには講義要綱や時間割表など履修登録に関わる改善すべき方向性について論議を深め、その成果を2004年度基盤研究報告書『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて』（A4判、144頁）として刊行しました。

3. 『報告書』と今後の課題

『報告書』は、資料分析によって得られた問題点やその改善策を論じた「研究報告編」と、「教養教育」の現状を各自で確認できるよう基本的なデータを網羅した「資料編」で構成されており、近過去に日吉キャンパスで展開されたいわゆる「教養教育」の鳥瞰図を提示し、それをどのように読みとるかの一例を示したに過ぎませんが、教育に携わる各人に「教養教育」の全体像に対する関心を喚起できれば、少なからず啓蒙的役割を果たすこととなります。また、特に指摘されねばならないのは、日吉における「教養教育」が壮大な規模で展開されながらも、その全体像を鳥瞰し点検を行う組織がほとんど存在しないという現実です。日吉の学部共通総合教育科目（外国語、体育実技は除く）は平均で約380コマ（通年換算）設置されており、それらを専任・非常勤を含めた300名以上の教員が担当しています。それは混沌ではなくむしろ整齐たる豊かな雑木林ですが、森林管理人がいないということもあります。総合教育科目が、ここ数年間で急速に全学部共通化にシフトして学生の選択肢が広がってきたいまこそ、その豊饒さを十分に生かすために、科目全体の組み立てや配置を、学部や部門を越えて検討・点検できる場の創設を提言したいと思います。それを具体化するためにも継続的な研究活動が望まれるところです。

（木俣 章）

2005年 基盤研究スタート

「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」

本研究は、2003～2004年に展開した基盤研究（報告書：『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点 将来への提言を含めて』）の成果を受け、さらに広い視野から大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討するとともに、現在慶應義塾大学で行われている教育カリキュラムのあり方を検証するものです。

教養教育の理念と、義塾の現状分析をリンクさせながら、現在の教育のあり方に関する短期から中長期にわたる改善の提言を目指しています。

近年各学部がカリキュラム改革を行ってきましたが、各教員とも他学部のカリキュラムの動向については、ほとんど認識がないのが現状です。本研究は、各学部のカリキュラム改革とその成果についての情報交換の場をも提供し、大学という知的生産の共同体において、われわれは学生に何を伝えていくのか、学生をどのように育てていくかについて、広い視点から学び合い、研究する場としてこの基盤

研究を展開していきます。

折しも、慶應義塾は創立150年に向けて、大学学部教育の質的強化をする指針を出しています。教養研究センターで培われた知見がそのために生かされるように、質の高い研究を提示し、現在のディグリー制度の再検討と再構築も視野に入れた提言を行い、かつそのためのチャートを示すことも目指してゆきたいと考えています。

研究会はつねに塾内公開の形で行われています。研究会日程などの詳しい情報は、<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/> をご覧ください（塾内のみからアクセス可）。

研究会メンバー：伊藤行雄（座長）、金田一真澄、坂本光、石井明、萩原真一、村山光義、佐藤望（以上幹事）、大場茂、倉田敬子、納富信留、岩谷十郎、大久保教宏、木保章、小室逸樹、鈴木透、種村和史、小町谷尚子、太田達也、倉館健一、小磯勝人（慶應義塾大学出版会 オブザーバー）、および教養研究センター所長・副所長

（佐藤 望）

「身体知プロジェクト」

昨今哲学的および芸術的な意味を超えて、「身体論」や「身体知」という言葉がいろいろな場面で語られています。それは単に肉体としての身体のみならず、人間をホリスティックにとらえた上での身体であり、当然ながらそこには精神論や感情論も含まれます。

このような身体に対する議論の背景には、時代の突きつけるひとつの危機感があるのではないのでしょうか。この危機感とはテクノロジーの波の中で希薄化する身体意識やアイデンティティの喪失、あるいはコントロール不可能な私たちの精神状態・感情・不安といった諸現象が呼びおこすものであり、それらの危機感世代を越えて、こと教育現場で切実に意識されているものでもあります。

同時に教育に関わるものは、人間の諸活動は、すべて「身体」を抜きにしては語れないという事実を明確に再認識し、その意識を共有していくことの重要性に気付き始め、個人々がそれぞれの努力とそれに基づく議論を積み重ねています。

21世紀というコンテクストの中で、私たちが再建もしくは発見すべき「身体」は何であり、それをひとつの「知」として次世代に伝えていくにはどうしたらよいのか。専門教育とは一線を画する身体を中心とした新しい形の教養教育カリキュラムが可能なのかどうか。そのような見地のもとに、お互いの経験と問題意識を共有し、教職一体となっ

て「身体」を軸とした新しい教育の可能性を考える場として2005年5月にスタートしたのが、教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」です。

プロジェクトでは、以下の手順で研究を進めていく予定です。

- 1) さまざまな「身体知」のあり方とその歴史的背景を見据える。
- 2) 「身体知」教育の現場を知ると同時に実践の場を視察し、意見交換を行う。
- 3) 実験授業を通じて「身体知」教育の意義と方法を探ると同時に記録を残す。
- 4) 実践の成果を踏まえて教養教育としての「身体知」を理論化する。

研究期間は3年間を予定し、1年目は勉強会、意見交換、および調査を主体とし、2年目にカリキュラム構築と実験授業の立ち上げ、最終年に研究のまとめとその成果を出版、およびさまざまなメディアを使って公開する予定です。現在はコアとなる教職員でプロジェクトのあり方を模索しており、7月以降は研究会そのものを、関心のある教職員の方々の自由参加によって運営していく予定です。研究会の開催予定と活動報告は随時ホームページでお伝えしていきます。ひとりでも多くの方のご参加をお待ちしております。

（横山千晶）

日吉行事企画委員会（HAPP） 春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）の春学期の活動についてご紹介します。この委員会では、新入生歓迎セクションと公募企画セクションを二本の柱と定めて行事を企画・開催しています。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトです。2005年度春学期は、以下の企画を実行し、現在のところ、いずれも好評を博し、成功裡に進行しています。

春学期新入生歓迎行事は、昨年に引き続き、塾内諸機関・諸団体との共同開催がひとつの特徴となりました。このことにより、経費・労力の節約に加えて、学内連携においても、非常に有益でした。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが主催するもの



です。この企画は、現在14件の応募申請を精査している最中입니다。我々は、HAPPの活動を通して、慶應義塾が自由な発想をもって学問に向かい合う場であることを学生諸君に感じてもらいたいと考えています。

（小菅隼人）

タイトル	内容	日時	場所
「塾長と日吉で語ろう」(塾長室と共催)	塾長講演会と討論、懇親会	4/13(水)	J 24教室
「天鼓 弄鼓之舞」(能楽研究会〔観世会〕と共催)	坂井音重氏による能公演	4/26(火)	来往舎イベントテラス
「塾長と日吉の森を歩こう」	自然観察と写真展、塾長との交流	5/7(土)	来往舎イベントテラス集合
「ジョン・チャス「愛」のコンサート~ヴァイオリン演奏とトークによる未来へのメッセージ~」	「愛」をテーマにしたジョン・チャスによるトークを交えながらのヴァイオリンコンサート	5/10(火)	来往舎イベントテラス
「ハリー・ポッターの魔法とは!？」(外国語研究センターと共催)	翻訳者 松岡佑子氏が語る翻訳・出版に至った経緯、物語の魅力・面白さ、翻訳の楽しさ・難しさ	5/12(木)	J 11番教室
「幻容の道」(アート・センターと共催)	和栗由紀夫氏による舞蹈公演	5/18(水)	来往舎イベントテラス
「ポジティブ・オルガンとチェンバロによる鍵盤音楽フェスティバル」	ポジティブ・オルガンとチェンバロの演奏	5/下旬~2週間	来往舎イベントテラスおよびシンボリアム・スペース
「環境週間」(環境サークルECOと共催)	環境週間	6/26より	日吉キャンパス
「フットサル・フェスタ」	スポーツ・イベント	検討中	検討中

「スタディ・スキルズ」から 「アカデミック・スキルズ」へ

2003年度に実験授業としてスタートした「スタディ・スキルズ」。学生の評価も高く、同時に学部においてその意義が認められたということもあり、2004年度からは教養研究センター設置科目として、いくつかの学部で単位が認定されました。その授業内容などについては、これまで報告してきたとおりです。今号では、昨年度末に行ったいくつかの活動を紹介します。

2004年2月8日(火)に、履修学生の中から各クラスの代表者3名ずつによる「プレゼンテーション・コンペティション」を実施し、極東証券株式会社社長および取締役にも特別審査員として参加していただきました。

また、履修学生の最終成果物である論文の中から優秀作品を

選出する「論文コンペティション」を開催するとともに、学生から提出された論文をまとめ、『学生論文集』(A4判272ページ)として刊行しました。

さらに、昨年度、一昨年度に行った授業の録音を起こし、原稿にし、それに手を入れたものを編集して『Teachers' Manual』を刊行しました(A5判168ページ)。『Teachers' Manual』というタイトルになっていますが、実際の内容は、授業中に担当教員たちが話したさまざまな知的技法についての基本的な考え方をまとめたものです。この小冊子の試みは現在進行形で、新たな経験と議論の深まりにより次々と書き換えられていくべきものであると考えています。

そして本年度、「スタディ・スキルズ」は「アカデミック・スキルズ」と名称を変更し、コマ数も3コマに増加。担当教員の輪も広がり、さらに進化を続けています。

（横山千晶）

シンポジウム「21世紀の商店街」

研究教育活動を通じて慶應義塾大学と周辺地域との連携を深める目的から、2004年4月に商学部設置総合教育セミナー「21世紀の商店街」は開講されました。その1年間の活動成果を報告するとともに、地域・行政代表の方々や専門研究者を交え商店街の未来について語り合うべく「21世紀の商店街シンポジウム」が企画され、慶應義塾大学教養研究センター行事「開かれゆくキャンパス」第2弾として、2005年1月18日(火)16:30より慶應義塾大学日吉来往舎1階シンポジウム・スペースにて開催されました。日吉商店街や地域住民の方々、横浜市や港北区の行政関係者など来場者は100人近くを数え、さらに、それぞれ独自に地域に関わる活動を行っている学生が多数参加したのも新鮮な驚きでした。

シンポジウムの前半は4名の担当教員(石井明・小瀧昭夫・田上竜也・牛島利明)毎に分かれたグループの代表学



公開セミナー「ヨーロッパの大学改革と日本の大学」

本セミナーは、学術フロンティアの「リベラル・アーツ教育のモデル構築」2004年度最後の企画として、2005年3月29日(火)13:00~16:00、来往舎シンポジウム・スペースにて行われました。ドイツ学長協議会 アジア・オセアニア交流担当主幹のマライケ・ヴァーラス氏を迎え、ヨーロッパの大学改革の現状と特にポーロニャ・プロセス(ヨーロッパの大学の統一化を目指した国際協定)についてと、日本とEUの学生交流に関する報告をしていただきました。

慶應義塾からは、理工学部の小尾晋之介氏より、「EU - 慶應義塾の国際交流」と題し、主に理工学部で展開されている国際交流プログラムについての報告がなされました。

大学改革を語る時、多くの場合米国の先進例と日本との比較ということで語られてきました。日本の大学の伝統を考えると、ヨーロッパの大学が国境を超えた大学の基準づくりや、そ



生による発表に当てられ、各15分のプレゼンテーションに対しいくつか質問が寄せられました。代表学生は若干緊張感みでしたが、発表の重責を十分に果たしたといえるでしょう。

シンポジウムの後半では「大学は地域に貢献できるか?」と題したパネルディスカッションが行われました。牛島利明商学部助教授が司会を務め、最初のパネラーによる意見発表では、熊井憲一氏(日吉商店街協同組合理事・(株)日吉家具センター代表取締役)から日吉商店街の厳しい現状について、宮崎孝雄氏(横浜市経済局商業・サービス課長)から商業集積地を支援する横浜市の取り組みについて、また平田光子氏(日本大学大学院グローバル・ビジネス研究科助教授)から東海大学在籍中に秦野市、相模原市の商店活性化提言を行った経験についてお話しいただきました。続いて大学と地域との連携に関するディスカッション、さらには活発な質疑応答が交わされ、当初2時間半の予定が30分近くも延長されるなど、活況を呈して終了しました。

(田上竜也)

こから生じるさまざまな問題を抱えているという点は、日本の大学、また義塾の教育の将来像を見通す上でも、きわめて有益な情報を得ることができたと思います。また、活発なディスカッションにより、国際的な脈絡から義塾の教育の在り方を見直す重要な機会を得ることができたといえるでしょう。

本セミナーの完全な記録は、教養研究センターから発行される報告書(CLAアーカイブズ)のかたちで出版されています。

(佐藤 望)



2004年度第2回運営委員会

2004年度第2回運営委員会が、3月16日（水）15:00から16:30まで、来往舎シンポジウム・スペースにて開催されました。

最初に黒田昌裕常任理事より挨拶があり、次に2004年度後期分の活動について、「センターシンポジウムの開催、センター選書の発行、韓国を対象とした教養教育調査の実施」など、横山所長をはじめ、各担当から詳細に報告されました。

引き続き審議事項に移り、人事について、コーディネーター・オフィスのメンバー、各種委員会のメンバー、所員・兼任研究員の就任・退任が承認されました。また、2005年度の活動計画案とこれに伴う予算案が説明され、承認されました。活動計画は、他大学調査や一貫教育校との連携を積極的に推進すること、センターホームページの改訂や新しいセンターパンフレットの作成、日吉キャンパス公開講座の運営などが主な内容でした。

最後に懇談事項として、センターの運営基盤の安定のための方策、センターへの指定寄付の募り方、センター事業を学部授業などに還元する方法などが話されて、閉会しました。

（宮木さえみ）

「刊」行物案内

教養研究センターでは、昨年度末に2冊の刊行物を出版しました。

ひとつは、2003年度10月7日から12月16日にかけて開講された極東証券寄附講座「生命の魅惑と恐怖 生命にまつわる多彩な知をめぐる」での講演に基づいた『生命の教養学へ 科学・感性・歴史』（慶應義塾大学教養研究センター編、慶應義塾大学出版会）です。編集にあられた武藤浩史法学部教授、コーディネーターの高藤太郎文学部教授、田上竜也商学部助教授、そして極東証券寄附講座運営委員会の皆さんのご協力、刺激的な講演の臨場感を伝えてくれる刊行物となりました。

もうひとつは、厳正なる審査の結果「教養研究センター選書」第二回公募に採択された井上逸兵法学部教授による『ことばの生態系 コミュニケーションは何でできているか』です。コミュニケーションの「資源」としての言語という興味深いテーマを、身近な事例で読者の関心をひきつつわかりやすく論じています。「言語 = コミュニケーション」という誤解をとくために、「相互行為の社会言語学」の立場から、「ことば」の生態系へのアプローチを試みる言語学への好入門書となっています。

（岩波敦子）

Topics

トピックス

2005年度日吉予算管理部門内調整費 「新しい教養授業の支援」採択事業(第1次)の採択結果

平成17年度予算管理部門内調整費のうち「新しい教養授業の支援」部門の予算枠3000万円の中から、日吉キャンパスとして新しい教養教育の授業開発・実施およびこれに関わる作業・成果の発信、あるいは既存の授業の改善などを目的とする事業を公募し、効果の期待できる事業に対して支援を行います。これに伴い日吉キャンパス専任教職員にむけて公募を行ったところ、15件（総額39,053,291円、内訳200

万円未満9件、500万円未満4件、500万円以上2件）の応募申請がありました。教養研究センターは、この応募に関与しない研究企画ボードのメンバーによる選定委員会を組織し、同委員会による厳正なる審査の結果、次のとおり「新しい教養授業の支援」事業を採択しました。

また、第2次公募を6月末を締切として行いました。その採択結果については、決まり次第、掲示にてお知らせします。

第1次採択 13件（総額 20,676,125円）

事業代表者	事業題目	採択金額
中山 純	ドイツ語学習支援環境構築プロジェクト	6,000,000
市古みどり	情報リテラシーを獲得するためのウェブベースによるチュートリアルシステムK I T I Eの英語サイト立ち上げ	5,652,125
高山 博	日吉キャンパス内および周辺の遺跡（先史～近現代）情報のデジタル化（測量調査、GIS分析、遺物の電子カタログ化等）とWeb公開	500,000
坂本 光	読解力強化を中心とした能力別クラス編成による英語教育カリキュラムの開発	1,500,000
小湯 昭夫	ヒヨシエイジ2005を通して経験としての教養教育の実践 スポーツとアートと社会参加による地域活性化コミュニティデザイン	2,000,000
武藤 浩史	身体知関連科目と連携した黒沢美香ダンス公演 + 対談 + ワークショップ	1,744,000
篠塚 憲一	ボランティア学ってなに！ II	1,500,000
石井 明	日吉キャンパスにおける身体知教育の充実へ向けて（教養音楽教育）	110,000
三瓶 慎一	戦後ドイツにおける「過去との関わり」再考 「白バラ」展を通じて	270,000
シャルト, ミハエール	法学部設置全学部対象ドイツ語インテンシブコース初級クラスにおける日韓交流	270,000
横山 千晶	ドラマを使った教養教育・言語教育の実施と開発・改善	280,000
トビン, ロバート	コンピュータ・シミュレーション導入によるセミナー：グローバル企業におけるリーダーシップ	250,000
熊倉 敬聡	ワークショップの可能性	600,000

教養研究センター

「CLAアーカイブズ・シリーズ」刊行

教養研究センターでは各年度活動報告書のほか、センター主催のシンポジウム報告書、年2回発行されているニュースレター、各ボード企画のワークショップのレポートなど、さまざまな刊行物を発行しています。定期的に行われるこのような活動のほかに、所員が率先して企画するセミナーや特別講演会などの記録も、「CLAアーカイブズ・シリーズ」として定期刊行物とは別に、発信していきたいと考えています。

その第1号となるのが、本年3月29日に学術フロンティア「リベラル・アーツ教育のモデル構築」プロジェクト主催で開催された公開セミナー「ヨーロッパの大学改革と日本の大学」です。

シリーズ第2号に予定されているのが、遠山敦子氏(財団法人国立劇場運営財団理事長、元文部科学大臣)と安西祐一郎塾長のおふたりを講師として、伊藤行雄経済学部教授の司会のもと7月4日(月)14:30~16:30、日吉キャンパス来往舎シンポジウム・スペースにて開催された特別公開対談「教養教育の将来を見据えて 次世代に何をどう伝えるか」です。

この公開対談は今年度はじまった基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」の活動の一環として企画されました。2008年に創立150年を迎える慶應義塾において、教育機関としての大学の使命とは何か、伝えるべき教養とは何か、その知見をどのように次世代に伝えていくのかという議論は避けて通れません。今回日本の高等教育改革の牽引力としてご活躍されている遠山敦子氏をお迎えし、安西祐一郎塾長と21世紀の「教養」のあるべきビジョンを大いに語り合っていました。対談後も大勢の参加者から質問が寄せられ、このテーマに対する関心の高さを再確認することができました。

(岩波敦子)

2005年度慶應義塾大学

日吉キャンパス公開講座

本年度は、「創作とメディア」というテーマで、10月1日から12月3日まで、毎週土曜日3時限目13:00~14:30、4時限目14:45~16:15で、第4校舎J14教室で行います。このテーマの趣旨は、「人間の創作行為が、さまざまなメディアによっていかに表現され、社会という共同体に伝えられるかを考えます。人間が何かを創り出そうとする時、言語(文字や音声、小説や詩など文学)音楽、美術、映像、演劇、スポーツといった多様な媒体、すなわちメディアは、その創作に形式を与え、同時にまた伝達的手段としても機能します。(中略) 創作パフォーマンスとメディアの関係を考えることが、歴史や文化・社会について考える上でのひとつの視点ともなりうることをわれわれは切望しています」ということです。より具体的には、「ハリウッド映画に見るアラブの表象」「映画におけるラテンアメリカのイメージ」「映画と音楽」「情報化時代の映像原理」「政治とメディア」「スポーツとメディア」などメディア芸術からスポーツ表現におけるメディアの役割まで、幅広い分野に及んでいます。講師陣も、学内からはもちろんのこと、青島健太氏〔スポーツジャーナリスト〕、河野太郎氏〔国会議員〕、丸山俊一氏〔NHKディレクター〕、田中ウルヴェ京氏〔ソウルオリンピック選手〕など、多彩な顔ぶれです。

(小淵昭夫)

事務局だより

今年で開所4年目を迎える教養研究センターと社会人4年目の私は、同時期に社会という荒波に乗り出した、いわば同期です。それを思うと、まだまだ未熟な私に比べ、既に大きく発展を遂げ、飽くなき向上心のもと次々と新たな権を繰り出す教養研究センターの姿に、これまで関わってこられた方々の努力を実感する日々です。

この4月にこちらに着任してから、気がつけば3カ月が経とうとしています。何もわからぬままだひたすらに目の前の業務をこなしてきた私

ですが、おぼろげながらこの教養研究センターの担う壮大な役割、目標をわかりかけてきた今、これからこのセンターがどのような活動を起こし、変化の渦を作り上げ、人々を感嘆させてゆくのか、わくわくしているところです。そのような活動に携われることを大変嬉しく、また光栄に思う気持ちを原動力とし、力不足ではありますが、心強い事務室のメンバーと共に研究支援に尽力していきたいと思っています。

(高橋純子)

Newsletter

2005. Jul. No.6

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2005年7月15日

代表者 横山 千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111 (代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/